

『医語類聚』の著者 海軍大軍医 奥山虎章

深瀬泰旦

はじめに

明治初年に編纂され、おおくの利用者をえたにちがいない『医語類聚』や『独和医学辞典』の著者である海軍大軍医奥山虎章とらふみについて、諸書に散見される資料を収集した結果、時間と場所を異にした三人の奥山玄良と、一人の奥山虎章の史料を披見することができた。これについて考察をくわえ、これが一人の人物に収斂することが可能であるとの結論をえたので、ここに報告する。

横浜軍陣病院の『日記』にみる奥山玄良

慶応四年(一八六八)鳥羽伏見の戦いに端を發した戊辰戦争は、官軍優勢のうちに戦線は北上し拡大の一途をたどった。それにともなつて負傷兵の数も増加したので、後送兵站病院として横浜軍陣病院が開設された。時に慶応四年閏四月一日のことで、横浜・野毛の修文館内にもうけられた。¹⁾²⁾

イギリスと親しい関係にあつた薩摩藩は、公使ハリー・パークスに依頼してウィリアム・ウィリスを横浜軍陣病院の医師としてむかえた。さきに京都の相国寺内の養源院にもうけられた薩摩病院において、負傷兵の治療にあつたウイ

リスがすばらしい治療成績をあげたという実績があったので、その力をかりようとしたのである。

この軍陣病院の御使番である尾張藩佐藤嘉七郎金義が、慶応四年四月一八日から同年一〇月二一日までのその病院の動静をしるしたのが、横浜軍陣病院の『日記』⁽³⁾（以下『軍陣病院日記』という）である。本書には奥山玄良の名が次の五カ所にみられる。

(一) 左之面々当分之内被成御雇横浜病院手伝被仰付候旨以御書附面御達候事

因州 山内逸斎

町医 奥山玄良

筑州 武藤道甫⁽⁴⁾

(二) 左之医是迄御雇医ニ候処御用達ニ付月給被相増以後五両宛被下賜候旨相達ル

奥山玄良⁽⁵⁾

(三) ドングルイ方江罷越候様との儀ニ付左之面々召連参り候処シドル江も罷越居中英人病院等爲見候事

石神 福田 高地 奥山 渡辺⁽⁶⁾

(四) 大田原藩矢野良橋并御雇医奥山玄良東京へ罷越⁽⁷⁾

(五) 今日も陸地より左之通差送ル

薩州……大垣……長州 頭取差添医福田純一 御雇医奥山玄良⁽⁸⁾……

慶応四年八月五日「町医奥山玄良」は、横浜軍陣病院手伝に任命された。同時に採用された他の二名には、それぞれの出身藩の脇書があるが、玄良は町医と表現されている。

のちにのべるように玄良は上山藩医である。この時期上山藩は白石列藩会議や奥羽越列藩同盟に参加して、いわゆる朝敵側にたっていたので、東北諸藩に属していたものはたとえ医師という非戦闘員であっても、その所属する藩をあか

らさまにすることにはばかりがあったため、それが「町医」という表現になったものと思われる。

横浜軍陣病院手伝医師に就任後、およそ四〇日にして、玄良は月給が五両に昇給した。それまでの給与についての記載はない。⁽¹⁰⁾

ドングルイはウイリスとともに軍陣病院に勤務しているイギリス海軍軍医のダンウッドイー John Dunwoodie 氏、一八六八年の来日から二年間、日本の医療のために尽力した。⁽¹¹⁾ この『軍陣病院日記』には、ドンクローイ、ドンウジー、ウドンシーなどいろいろな名称で登場している。シドル Joseph Bower Siddall もイギリス公使館付医官で、ウイリスが越後や東北に巡回治療におもむいた折には、横浜にのこって軍陣病院の中心人物としてこの病院を取り仕きった。⁽¹¹⁾

石神以下五名はいずれも軍陣病院の勤務者である。⁽¹²⁾

(五)についてはすこしく解説を要する。慶応四年秋に東京下谷に大病院ができて、横浜軍陣病院の患者、医師ともそちらに引うつった。この移転の話は九月になってはじまったものと思われる。すなわち、

付属之面々并両賄之者以後東京へ病院被移候節二至り是迄之通御用相動候様有之度委細存念之趣下参謀へ談判済。⁽¹³⁾
と九月朔日の項にみえる。そしてその準備として「平病軽傷半癒等」の患者をどのように移送するかの相談がはじまったのは九月二八日である。⁽¹⁴⁾ 両三度の相談ののち、一〇月三日から「川蒸気船二而」、あるいは「陸行」で患者の移送がはじまり、一〇月一七日にはすべての患者の、翌一八日にすべての医師の引払いが完了した。⁽¹⁵⁾

その一環として奥山玄良は、患者につきそって陸路をとって東京へ移動した。この日は海路からの患者移送があり、もともともおおくの患者が東京へ引うつった。明治元年（九月八日改元）一〇月七日のことである。

大病院の『日記』にみる奥山玄良

本史料（以下『大病院日記』という）は明治新政府が旧幕府の医学所を復興した慶応四年六月二六日から、同年一二月二

九日にいたる約半年間の、下谷に開設された大病院の『日記』である。

その一〇月七日の条に

横浜より之金瘡人三拾人余昼時頃より追々着ニ相成其外奥州之疵人入院大混雜之義尚又夜ニ入横浜より三拾人余外増式拾人程参り候由夫々手配いたし候事⁽¹⁷⁾

さきにあげた『軍陣病院日記』の記事とまさに一致しており、海路と陸路から昼夜にわけて転院した様子がうかがえる。『大病院日記』に奥山玄良の名が最初にみえるのは、一〇月八日の辞令である。

奥山玄良

右御雇ニ而病院医師試補手伝ニ而通弁役申付之⁽¹⁸⁾

この日石神良策が病院医師に、高地晴謙と矢野良橘が玄良と同じく病院医師試補手伝に任命された。ついで一月一〇日に「病院医師試補手伝」から「病院医師試補」に、玄良ら四名が昇進した。⁽¹⁹⁾これは翌明治二年三月の「医師姓名」によってもうらづけられる。⁽²⁰⁾

ここで注目したいのは、病院医師試補手伝に任命された奥山玄良は、同時に「通弁役」に兼任で任命されていることである。この病院で通訳を必要とする外国人といえばイギリス人医師なので、玄良が英語の語学力においてすぐれていたことをこれによってしることができるといえる。

横浜軍陣病院勤務の奥山玄良が、東京の大病院に転属したのが一〇月七日であり、その翌日の一〇月八日には大病院医師試補手伝に任命されているので、ここにはあきらかに連続性がみとめられ、二人の奥山玄良は同一人物とみて不合理な点は見出されない。

ウイリスは文久二年（一八六二）イギリス公使館付医官として来日し、薩摩藩との親密な関係から慶応四年閏四月一三日に横浜軍陣病院に勤務することになった。それにおくれること四カ月の八月五日に、奥山玄良が横浜軍陣病院の手伝

を命ぜられている。兄奥山虎炳が堀達之助から英語を学んでいるので、玄良も同じ道をあゆんだものと考えられる。英語に堪能であった玄良は、ウイリスとの親交は他の医師よりも一層深かったものと考えられる。

官軍にしたがって北越地方から会津地方に転戦したウイリスは、おおくの負傷兵を治療して一二月二九日に帰京し、大病院に勤務することになった。この時玄良はすでに大病院に勤務していたので、ここにまたウイリスとの交流が再開されることになった。

鹿児島医学学校御用掛兼病院掛の奥山玄良

明治新政府のドイツ医学採用によって、ウイリスは東京医学学校教師の職を辞して、門人林卜庵をしたがえ、石神良策に案内されて、明治二年一二月三日に富士山丸で横浜をたつて鹿児島入りした。⁽²³⁾薩摩藩の新医学学校教師の職につくためである。

鹿児島に西洋医学学校が創立されたのは、明治二年一二月二日である。⁽²⁴⁾翌明治三年正月に藩の知政所は、八名の医師を医学学校御用掛兼病院掛に任命した。

藤田圭甫 新宮拙蔵 山本淳輔 奥山玄良 永井文斎

右者医学学校御用掛兼病院掛被成御願度思召候間此旨申達候

明治三年正月

知政所

石神良策 足立慎吾 山下弘平

右者医学学校御用掛兼病院掛被仰付候条可申渡候

この八名の医師のうち新宮、石神、足立、山下の四名は薩摩藩出身であるが、他の四名のうち藤田は大村藩、山本は福井藩の出身であり、のこりの二名は不明とのことである。⁽²⁶⁾ 創立当初の鹿児島医学学校の教師や、その後教師に採用された人物の中には、他藩出身の医師がすくなく存在していることは、次の例からもうかがえる。

ウィリスの鹿児島入りにしたがった門人林卜庵（一八二八—一八八二）は近江国の生まれで、のち上京して明治五年に海軍少軍医になった。⁽²⁷⁾

紀州藩医の家に生まれた三田村忠国（一八四七—一九一三）は、若くしてオランダ医学を学び、維新直後ウィリスやシツドールの教えをうけ、明治二年三月には大病院医師試補に任命された。明治三年六月鹿児島にもむいて医学校に勤務し、ウィリスをたすけた。三田村は英語が堪能で、ウィリスが鹿児島県庁に提出した意見書や報告書のおおくは、三田村が翻訳したものだといわれている。西南戦争には薩軍の軍医長として従軍したが、とらえられて三ヶ月の獄中生活のち、ゆるされて海軍に出仕した。海軍軍医総監まで昇進した。

三田村同様、のちに海軍軍医総監に昇進した加賀美光賢（一八四六—一九〇七）は甲斐国の生まれ。明治元年東京にて石神良策の書生となり、ウィリスについて医学をおさめた。通訳としてウィリスにしたがって鹿児島入りした。

鹿児島医学学校創立当初からその運営にあづかっていた藤田圭甫は肥前国大村藩医⁽²⁸⁾で、のちに大学東校から海軍医官に転じ、奥山虎炳とともに初期の海軍軍医制度確立に尽力した人物である。

これらの医師はいずれもウィリスや石神良策の縁故で鹿児島にもむき、医学学校の教員に就任した。とくに三田村はその力量をウィリスにみとめられ、加賀美や高木兼寛が海軍医官となって上京した後も鹿児島にのこって、医学校や病院の運営の中枢に参画していた。ウィリスがいかに三田村を信頼していたかは、萩原延寿がその論著「遠い崖」でくわ

しくのべている。⁽³¹⁾

語学力にすぐれていた奥山玄良は、医術の技量とともに通訳としての力もみとめられて、ウイリスにしたがって鹿児島におもむいたものと思われる。在来の諸書にはウイリスにしたがうものとして、石神良策、加賀美光賢、林卜庵の名があげられているが、玄良もウイリスとともに鹿児島入りしたことは、鹿児島医学学校設立当初から玄良がその事業に参画していた事実⁽²⁵⁾から、充分考えられることである。鹿児島医学学校には薩摩藩以外のおおくの医師が、教師や医員として関係していたことを考えると、鹿児島医学学校教師の奥山玄良は、大病院の医師奥山玄良と同一人物であると断定しうると思われる。

『公文類纂』と『官員録』にみる奥山虎章

奥山虎章が十五等出仕として海軍病院に勤務したのは、明治四年七月二四日である。このときの辞令には次のようにしるされている。

上山県／奥山玄良／源虎章

芝赤羽心光院借地

海軍病院出仕申付候事

辛未七月廿四日⁽³²⁾

これによって奥山玄良と虎章は同一人物であることが明確になり、上山県という表記によって父玄仲、兄虎炳との関係がみとめられる。また住所の「芝赤羽心光院借地」より、芝増上寺の別院である心光院⁽³³⁾（港区飯倉五丁目に現存）の借地に住居しており、父玄仲と同じ住所である。さらにこの年の一〇月には九等出仕となった。

一方明治初年の『官員録』所収の虎章は次のごとくである。

兵部省九等出仕（明治四年十一月）⁽³⁴⁾

兵部省九等出仕（明治五年二月）⁽³⁵⁾

海軍大軍医（明治六年一月）⁽³⁶⁾

海軍大軍医（明治七年一〇月）⁽³⁷⁾

これらはいずれも『官員録』所収の記事なので、その就任の日については不明である。

また『公文類纂』によると、明治五年正月二八日には「兵部省八等出仕」に昇進した記述があるが、『袖珍官員録』⁽³⁸⁾（明治五年）⁽³⁵⁾これを記載するのに必要な日時がたりなかったことを物語っているといえよう。明治六年七月五日には「海兵徴募ノ爲青森県へ出張ヲ命ゼラレ」⁽³⁹⁾て、七月一六日北海丸で出航し、同月二〇日に帰京している。⁽⁴⁰⁾

明治維新をむかえて軍制の確立をめざした新政府は、太政官のもとに海陸二軍を包含した軍務官を設置した⁽⁴¹⁾（慶応四年閏四月二日）。その分課には海軍、陸軍の二局のほか、築造、兵船、兵器、馬政の四司がおかれているが、のちの軍医部に相当する職掌はまだない。

ついで五月二三日に軍務官に病院掛がおかれたが、その活動については記録がのこされていないので、内容はまったく不明といわざるをえない。明治元年一〇月一日山下門内に、わが国陸軍病院の濫觴といわれている兵隊仮病院が新設されたので、⁽⁴²⁾軍務官病院掛はその管理・運営にあつたのではないかと思われる。

東京・神田和泉町の旧藤堂邸に創設された大病院は陸軍主体の病院であつたため、海軍としては芝高輪御殿山の旧近江水口藩主加藤越中守明実の下屋敷に海軍病院を設立した（明治三年六月二五日）。名称は海軍病院ではあるが、病兵を治療するという病院機能ばかりでなく、海軍における医務や衛生業務をつかさどる行政管理機能も有していた。

それ以前の同年二月九日に兵部省——明治二年七月七日軍務官が廃止されて兵部省がおかれた——に海軍掛と陸軍掛がおかれ、兵部大丞の川村純義（薩摩藩）が海軍掛の総括者に就任し、海軍の医務関係の責任者として、鹿児島医学校でウイ

リスの右腕として校務の中枢にあった石神良策がえらばれた⁽⁴³⁾。

さらに翌四年二月三〇日築地海軍所の構内に海軍医局がもうけられ、その事務掛専務として石神良策は海軍の医務・衛生事務を一手に掌握することになった⁽⁴⁴⁾。同年七月五日兵部省内に海陸二軍共通の軍医寮がもうけられ、松本良順が軍医頭に任命された。

兵部省軍医寮は海陸二軍の衛生行政や人事管理をつかさどる部局であるが、薩摩藩出身者のおおい海軍は、長州藩山県有朋の推輓で軍医頭に就任した松本良順に反発して、その隷下につくことを肯じなかった⁽⁴⁵⁾。そこで松本良順も当初から無理強いをせず、もっぱら陸軍軍医寮の確立に力をつくした⁽⁴⁶⁾。

明治五年一〇月一二日海軍軍医寮が設置されると、石神良策は軍医助に任じられた。軍医頭は欠員なので、ここでも実質上の主宰者といえよう。

横浜軍陣病院からはじまり、大病院、鹿児島医学学校における石神との関係から、奥山虎章も石神をささえるスタッフの一人として兵部省に出仕し、海軍医官としての道をあゆみはじめたのである。しかし海軍医官としての生活は長いものではなく、明治七年一二月一八日に海軍を退官した⁽⁴⁷⁾。わずか二八歳の若さであった(表一)。

奥山虎章の家族

奥山虎章は弘化四年(一八四七)一二月四日に父玄仲の次男として生まれた。通称を又三郎といった(図一)。兄虎炳は

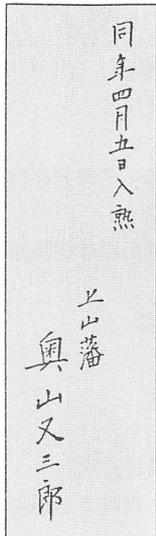


図1 奥山虎章の義塾(慶応2年) 署名帳、慶応2年

長崎で出生したが、虎章の出生地についての記録はない。妻いつは安政二年(一八五五)六月一八日に生まれ、長男栄次郎は明治十一年(二八七八)に出生した。この両者の歿年は不明である。

も
ない、
明治一
一年一
一月一
から芝
区に編
入され
た。⁽⁴⁸⁾
居住地は東京第二大区二小区桜田兼房町六番地で、あらたに制定された郡区町村編制法によって大・小区の廃止にと

表 1 奥 山 虎 章 略 年 譜 * 官 員 録 による

弘化 4 年 (1847)	12 月 4 日	奥山玄仲の次男として出生
慶応 2 年 (1866)	4 月 5 日	慶応義塾に入社する
〃 4 年 (1868)	8 月 5 日	横浜軍陣病院手伝
明治元年 (1868)	10 月 8 日	大病院医師試補手伝兼通弁役
	11 月 10 日	大病院医師試補
〃 3 年 (1870)	正月	鹿児島医学校御用掛兼病院掛
〃 4 年 (1871)	7 月 24 日	海軍病院出仕
	9 月	『講筈筆記』出版
	10 月	兵部省九等出仕
〃 5 年 (1872)	正月 28 日	兵部省八等出仕
〃 6 年 (1873)	1 月*	海軍大軍医
		この年『医語類聚』出版
	7 月 16 日	海兵徴募のため青森県へ出張 20 日に帰京する
〃 7 年 (1874)	10 月*	海軍大軍医
	11 月	『講筈筆記』翻訳出版により海 軍軍医寮より賞賜をうける
	12 月 18 日	海軍を退官する
〃 11 年 (1878)	3 月 20 日	『医語類聚』(増訂 2 版) 出版
〃 14 年 (1881)	5 月	『独和医学字典』出版
〃 20 年 (1887)	4 月 16 日	病歿 (41 歳)

虎章がいつかどこで医学を修めたかは不明であるが、慶応二年四月五日に慶応義塾に入社したという記録がある。⁽⁴⁹⁾

奥山虎章の医語辞典

奥山虎章は英語とドイツ語の医語辞典を編纂した。

英語医語辞典である『医語類聚』(図二)は、明治六年(一八七三)に名山閣から出版された。⁽⁵⁰⁾扉には図二のように英語の標題がふさされており、著者自身による英語の序文、ついで奥山虎炳の序文があつて、例言がつづく。

英語の序文では、医学の進歩がいちじるしいわが国ではあるが、学生のための医語辞典はまだ出版されていない。そこでダングリソンの医語辞典を典拠にして、解剖学、薬物学、生理学、外科、内科などの分野の術語を内容とする辞典の発刊を計画した、とのべている。例言においても、

予亦曾テ医学ノ一班ヲ管窺シ是患苦ヲ嘗ムルコト有年客歳会マ動氏医用字書ヲ得之ヲ閱スルニ語原正確註解明瞭トシテ大ニ得ル所アリ乃チ欣然大喜千金不啻因テ公務ノ余暇燈下寸光ヲ偷ミ纔ニ一二語ヲ拾ヒ傍ラ爾余ノ書中ヨリ手鈔シ日ヲ追月ヲ累ネ竟ニ一小冊子ニ満ツ今是ヲ公ニスルモ固ヨリ碩学君子ノ為ニアラス初学童蒙ノ一小助タラハ予カ幸甚シ

として、動氏医用字書を翻訳したものであることをあきらかにしている。当時は「ダングリソン」と発音していたので、これを「動氏」と表記している。

本文は図三のように英文はもちろん横書きだが、訳語である日本語は当時の出版物によくみられるように、横書きながら文字を横にたおして縦によむように組まれている。AからZまでの本文の辞書部分は二六八ページ⁽⁵¹⁾で、それに「方書略語之解」などの附録がついて、すべて三二〇ページである。

初版から五年後の明治十一年に、増訂第二版が出版された。英文の序文にはとくにみるべき事項はなく、初版でふれ

を上梓した。『医語類聚』の増訂第二版が出版されてから三年後の明治一四年（一八八一）に、奥山虎章は『独和医学字典』（図四）を採録した言語はドイツ語のみならず、「古典其用甚タ広」く「欧米諸州凡百ノ学普ク是ヲ以テ師走トス」る

A MEDICAL VOCABULARY IN ENGLISH AND JAPANESE	
Asmus,	呼吸促進
Abaissement,	降下(降壓候)
Abatis,	鳥高懸(ノ名)
Abdominal viscera.	腹臓
" ring.	腹輪
Abduction,	向々直ス(引取ス)
Abductor,	牽筋
Abcille,	蜂蟻(往々ノ)蜂ノ巣
Abies balsamea.	加那利松(ノ木)
Abiosis,	死
Ab lactatio,	離乳(ノ兒)
Ab luents,	清潔薬
Abnormily,	不常態
Abortificient ergotactia.	墮胎藥
abortion,	墮胎
Abortive,	墮胎藥

図3 『医語類聚』(初版)の第1ページ

ダングリソンの医語事典は *A New Dictionary of Medical Science and Literature* の書名で、一八三三年に初版が出版された。その後『医語類聚』が出版された明治六年（一八七三）までに一七版をかさねているが、虎章がどの版を参考したかは不明である。原著の部厚さから考えて、単なる訳書でないことはあきらかである。⁽⁵⁴⁾

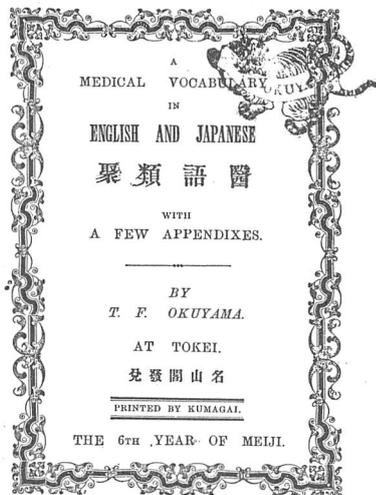


図2 『医語類聚』(初版)の扉

ていたダングリソンの名をみることはできない。初版の扉にあった虎の印章は、この版にはおされていない。⁽⁵³⁾ 英文序文につづいて、一二ページにわたって骨格図をはじめ、医療器械、医療器具などの図がふさされている。本文は三三二ページに増加して、単語の数はおよそ七千五百語におよぶ(表二)。

奥付によると発刊は明治一一年三月二〇日とあり、訳者出版人として「山形県土族 奥山虎章 東京第二大区二小区桜田兼房町六番地」⁽⁵³⁾、発兌として「芝大神宮前 牧野吉兵衛」としるされている。著者あるいは編者といわず訳者としているのは、ダングリソンの医語辞典を翻訳、編纂したと虎章自らが理解していたからであろうか。

表 2 『医語類聚』の初版と第二版の比較

	初 版	増訂第二版
出版年	明治 6 年 (1873)	明治11年 (1878)
大きさ	125mm×170mm	125mm×185mm
序文 (英文)	1 ページ	1 ページ
奥山虎炳の序文	1	—
例言	2	2
図版	—	12
本文	268	332
附録		
方書略語之解	12	13
骨之表	4	4
筋肉表	14	14
動脈分枝略表	10	10
元素通表	4	4
度量衡略表	8	37
靱帯略表	—	9
神経略表	—	9
服量表	—	30
合計	320 ページ	433 ページ

以上は上巻の著者の諸言にしるすところである。これにつづいて本文一四二ページにおよそ七千百語がおさめられており、附録として「人骨一覽表」「肌肉概表」「動脈分枝略表」「脳脊髓神経分枝略表」などがふされて、総計で一七六ページからなる。

奥付には「明治一四年三月七日版權免許」とあるのみで出版の日付はなく、扉に「明治一有四年五月新鑄」とあるの

ラテン語もおさめられており、参考にした書物は医学書はもちろんのこと、化学や物理学などの隣接領域の専門書におよんでいる。

本字典は三分冊からなっており、上巻は解剖学、生理学の語彙をあつめて『初編 解剖生理学語部』とし、中巻は理学、化学、薬物学、植物学の四科を、下巻は内科、外科、産科その他の学科の語彙をおさめている。



図 4 『独和医学字典』の欧文扉

で、これをもって五月の出版としてよいであろう。虎章はここに自らを訳者と表記している。⁽⁵⁵⁾

明治初年のわが国の医学はドイツ医学を採用したことによって、全国津々浦々にいたるまでドイツ医学が浸透していたと考えがちであるが、オランダ医学の退潮したあとをうけて、主流はむしろ英米医学であった。⁽⁵⁶⁾⁽⁵⁷⁾ドイツ医学はこれからという時代であった。⁽⁵⁸⁾

そのような時代状況をかながえると、英米医学の教科書がかなり広範に利用されていることが理解できる。その一例としてダングリソンの医語辞典がひろくむかえられ、それを翻訳編纂した『医語類聚』も原書と同様に、あるいはそれ以上に利用されたにちがいない。それにつづく『独和医学字典』の出版は、来るべきドイツ医学興隆のさきがけとして、時代をみすえた快挙といふべきである。

海軍病院の講義録『講筵筆記』

本書は海軍病院でおこなわれたエドウィン・ホイラーの解剖学講義を、奥山虎章と半井成質が共訳した書物で、全四〇巻、明治四年九月に海軍病院官版として出版された。奥山虎炳の例言によると、ホイラーの講義は、底本として有名なヘンリー・グレイの解剖書を利用しているとのことである。⁽⁵⁹⁾

このころの海軍病院は診療部門だけでなく、海軍全般の医療衛生面の行政・管理部門もあわせており、海軍病院学舎（のちの海軍軍医学校）は開設されていないので、⁽⁶⁰⁾ホイラーの講義はこの病院に勤務する医官を対象にしていたといえる。それを奥山虎炳の諸言は次のようにのべている。

今茲辛未官権リニ病院ヲ創シ以テ海兵ノ痾ヲ抱ク者ヲ養ヒ又夕英医法沕列児氏ヲ延シ施治ノ余リ更ニ講筵ヲ聞キ以テ院中子弟ニ解剖学科ヲ授ク

適切な訳語が存在しなかった時代なので、翻訳にあたって奥山虎章らはかなりの苦心があったのではないかと考えら

れる。これが『医語類聚』編纂の一つの契機となったといえよう。

半井成質は『講筈筆記』の翻訳刊行によつて、明治七年十一月に海軍軍医療——明治五年一〇月一三日海軍病院が改称された——から賞賜をうけているので、共同翻訳者である虎章も同様であつたと考えられる。

おわりに

横浜軍陣病院、東京大病院、鹿児島医学校で活躍し、のちに海軍に転じて大軍医に昇進した奥山虎章についてのべた。『医語類聚』や『独和医語字典』の編纂と、『講筈筆記』の翻訳が、明治初年のわが国医学界にはたした役割りはおおきいものがあり、英米医学の普及の上で見のがすことのできない業績といえよう。

稿を終るにあたり、おおく史料の披見とご助言をいただいた蒲原宏理事長、貴重な『講筈筆記』の閲覧をおゆるしいただいた宗田一常任理事、明治初年の陸海軍医官について、また鹿児島医学史についてご指導いただいた黒沢嘉幸先生、森重孝先生に感謝いたします。

種々、ご指導、ご助言いただいた酒井シヅ教授、奥山虎二先生にあらためて感謝の意をささげます。

本論文の要旨は日本医史学会例会（一九九五年四月二日）において発表した。

注と文献

- (1) 中西淳朗「横浜軍陣病院」の再検討『日本医史学雑誌』四〇巻、五一―九頁、平成六年
- (2) 中西淳朗「横浜軍陣病院」の再検討——サブノート』平成六年
- (3) 『日記』明治初年医史料（続）中外医事新報別刷『日本医史学雑誌』（復刻版）思文閣出版、昭和一九年
- (4) 同書、五五頁（慶応四年八月五日）
- (5) 同書、六九頁（明治元年九月一六日）

- (6) 同書、七三頁(同年九月二七日)
- (7) 同書、七四頁(同年一〇月一日)
- (8) 同書、七七頁(同年一〇月七日)
- (9) 佐々木克『戊辰戦争 敗者の明治維新』九八一—二二三頁、中公新書、昭和五二年
- (10) 『軍陣病院日記』には、医師頭取有馬意運が一五両、次席の柴岡宗伯が一〇両、医師大沢宗隆、松山不苦庵が五両との記載がある(三四頁)。
- (11) 蒲原宏『ウィリスとシドール——明治戊辰戦争の戦傷病者治療に動員されたイギリス人医師たち——』、宗田一ほか編『医学近代化と来日外国人』五三一—六二頁、世界保健通信社、昭和六三年
- (12) 石神は薩摩藩医石神良策で、慶応四年七月一日に有馬意運の後任として軍陣病院医師頭取に就任した。のち海軍軍医療助に栄進した。
- 福田は長州藩医福田純一。石神と同じ日に頭取差添に任じられた。
- 高地は高地晴謙。『軍陣病院日記』に藩名の記載はないが、医師である旨はしるされている。
- 渡辺は吉田藩士渡辺喜三太で、慶応四年五月八日に横浜出役御使番附屬に任命された(一二頁)。
- (13) 文献(3) 六五頁
- (14) 九月二八日、平病軽傷半癒等東京へ送り方之儀ニ付裁判所へ出勤毎事判事と遂談判とある(文献(3)七三頁)
- (15) 九月二九日、東京へ平病半癒軽傷等送り方之儀ニ付裁判所同心山村繁作借受差遣ス(文献(3)七四頁)とあり、その翌日にはそれぞれの担当が綿密に打合せをおこなっている。
- 一〇月朔日、東京病院会計懸六戸勘太夫儀万事問合之ため罷越、昨日差越置候同心万事問合済ニ而罷帰ル、病兵送り方ニ付問合筋有之裁判所へ源之進差遣ス(文献(3)七四頁)
- (16) 文献(3) 八一頁、八二頁
- (17) 『日記』明治初年医史料、中外医事新報別刷『日本医史学雑誌』(復刻版)七二頁、思文閣出版、昭和一八年
- (18) 同書、七二頁
- (19) 同書、八六頁

- (20) 『大病院医学所種痘所棟書院医師姓名』明治初年医史料、中外医事新報別刷『日本医史学雑誌』(復刻版) 一六一—二〇頁、思文閣出版、昭和一八年
- (21) ウィリアム・ウィリスについては次の諸書を参考にした。
- (a) 佐藤八郎『英医ウィリアム・ウィリス略伝』鹿児島大学医学部、昭和四三年
- (b) 鮫島近二『明治維新と英医ウィリス』日本医事新報社、昭和四八年
- (c) ヒュー・コータツツイ 中須賀哲朗訳『ある英人医師の幕末維新 W・ウィリスの生涯』中央公論社、平成五年
- (22) 深瀬泰旦『海軍大医監奥山虎炳(一八四〇—一九二六)』『日本医史学雑誌』四一巻、三二一—三四八頁、平成七年
- (23) 石田純郎『明治初期の兵庫のローカル英字新聞記事に見る在日外国人医師名』『日本医史学雑誌』二九巻、七〇—七二頁、昭和五八年。なお、この日を森重孝は二月七日としている(『ウィリアム・ウィリスの門下生たち』『鹿児島大学医学雑誌』四七巻、補冊一、一三—二二頁、平成七年)
- (24) 森重孝『薩摩医人群像』一八七頁、春苑堂、昭和五一年
- (25) 森重孝、同書、一八八頁
- (26) 森重孝『鹿児島島の医学』八七頁、春苑堂、平成五年
- (27) 『公文類纂』明治五年、巻一、三三九丁(防衛庁防衛研究所図書館蔵)
- (28) 萩原延寿『遠い崖 サトウ日記抄』第一三五二回、朝日新聞一九八六年二月一〇日
- (29) 萩原延寿、同論文、第一三三三回、朝日新聞一九八六年二月一二日
- (30) 深川農堂『大村藩の医学』六七—六八頁、大村藩之医学出版社、昭和五年
- (31) 萩原延寿、前掲論文、第一三五六回、朝日新聞一九八六年二月一七日
- (32) 『公文類纂』明治四年、巻六、四三丁
- (33) 『江戸名所図会』二六八頁、角川書店、昭和四一年
- (34) 『袖珍官員録』明治四年、和泉屋・須原屋版、寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録』第一巻、寺岡書洞、昭和五四年
- (35) 『袖珍官員録』明治五年、須原屋・和泉屋版、寺岡寿一編、同書第二巻、昭和五五年
- (36) 『袖珍官員録』明治六年、須原屋・和泉屋版、寺岡寿一編、同書

- (37) 『掌中官員録』明治七年、西村維商會、寺岡寿一編、同書
- (38) 『公文類纂』明治五年、卷五、七六丁
- (39) 『公文類纂』明治六年、卷六、一九〇丁
- (40) 同書、一九五丁
- (41) 陸軍軍医団『陸軍衛生制度史』一—三頁、大正二年 以下の記述も本書におうところがおおい。
- (42) 黒沢嘉幸 「山下御門内仮病院」『日本医学雑誌』四〇巻、二八一—二九二頁、平成六年
- (43) 『公文類纂』明治四年、卷四、三九丁 この文書は日付が欠落しているが、前後の關係から二月一七日とおもわれる。
- (44) 壁島為造『海軍衛生制度史』一卷、二頁、大正一五年
- (45) 内閣記録課編『法規分類大全』第一編、兵制門四、陸海軍官制四、陸軍四、九頁に「兵部省ヨリ軍医寮へ達（四年八月日 閏）」として「海陸軍附医官之義自今於東京軍医寮統括可致候事」とある。
- (46) 鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』一七五頁、東京医事新誌局、昭和八年
- (47) 『桜医会名簿』平成四年版
- 桜医会は旧日本海軍軍医出身者の団体で、この名簿には明治元年出仕者にはじまる全海軍医官が収載されている。
- (48) 現行の港区新橋二丁目五番地のあたりと推定される（『角川日本地名大辞典』東京都、二七四頁、昭和十三年による）。
- (49) 『慶応義塾入社帳』一卷、一七一頁、福沢研究センター、昭和六一年
- (50) 奥山虎章『医語類聚』名山閣、明治六年
扉には明治六年とあり、例言は明治五年七月の日付がある。私の所蔵する初版本は奥付を欠いているので、正確な発行日は不明である。
- (51) 一ページ二三行の組版だが、訳語が二行あるいは三行、さらには五行にもおよぶ単語があるので単純には計算できない。収録語数はおよそ六千語あまりといえよう。
- (52) 初版の扉の虎の印章は蔵書印ではなく、著者である虎章の印を押捺したものであると思われる。扉に著者自身の印章をおすのは、江戸時代の慣習にしたがったものであろう。
- (53) これは奥山文書所収の虎章の寄留地と一致している。なお桜田兼房町は現行の新橋二丁目のうち（『角川日本地名大辞典』

卷一三による。

- (54) ダングリソン Robley Dunglison(一七九八—一八六九)はイギリス生まれのアメリカの医師である。おおくの医書を編纂、出版しており、アメリカにおける医語事典、生理学書、医学史書の最初の著者といわれている。なおダングリソンとその医語事典については、稿をあらためて報告する予定である。
- (55) さきの『医語類聚』同様に、本書にも底本にした独語医語辞典があると思われるが、本書からそれをうかがいしることはできない。
- (56) 阿知波五郎「明治初期英米系医学訳書原著とその性格」『日本英学史研究会研究報告』三七号、一一一—一六頁、昭和四〇年
- (57) 阿知波五郎「明治初期の日米医学交流について」『日本医事新報』二一七四号、四三—四六頁、昭和四〇年(『近代医史学論考』二二七—三四頁、思文閣出版、一九八六年に再録)
- (58) 阿知波五郎「近代日本の医学——西欧医学受容の軌跡——」、三二—三四頁、思文閣出版、一九八二年
- ここで「明治一五年前からドイツ語系が次第に比重を増し、明治二〇年ごろには、日本国中ドイツ語系でほとんど塗りつぶされ」たのべられている。
- (59) エドウィン・ホイラーと『講筵筆記』については、長門谷洋治「アンダーソンとホイラー——本邦海軍軍医教育の基礎を築いた二人の英人医師」宗田一ほか編『医学近代化と来日外国人』八四—九〇頁、世界保健通信社、昭和六三年、にくわしい。
- (60) 海軍軍医学舎が開設されたのは、明治六年八月九日である。
- (61) 田中助一『防長医学史』下巻、二六頁、聚海書林、昭和五九年

(順天堂大学医学部医史学研究室)

Dr. Torafumi Okuyama, Naval Medical Officer and the Author of the Dictionaries of Medical Terms

by Yasuaki FUKASE

Dr. Genryo Torafumi Okuyama, the second son of Dr. Genchu Okuyama of the Kaminoyama clan, was born on Dec. 4th, 1847. His elder brother Dr. Toraakira Okuyama was promoted to Dai Ikan 大医監 (Senior Captain), the highest rank of medical officer in the Japanese Navy, and rendered distinguished services in the establishment of the naval medical systematization in the early Meiji era.

Dr. Torafumi Okuyama, who was appointed as medical officer of the Yokohama Army Hospital and transferred to Daibyoin in Edo, was engaged in medical treatment of injured soldiers during the Boshin-war in 1868.

He went to Kagoshima with William Willis and as one of the founders of the Kagoshima Medical School, gave students education there. He resigned his naval position in 1874, when he was Dai Gun I 大軍医 (Senior Lieutenant) and died at the age of 41 in April 16th 1887.

Dr. Torafumi Okuyama compiled *A Medical Vocabulary in English and Japanese* (“Igo Ruizyu” 医語類聚) and *Deutsch-Japanisches Hand-Wörterbuch für Medizin* (“Dokuwa Igaku Ziten” 独和医学字典) and published “Koen Hikki” 講筵筆記, the translation of the lectures by Dr. Edwin Wheeler.